

## DV をめぐる知識の社会学的研究

——新聞記事の分析を中心に——

筑波大学 川村智樹

### 1 目的

本報告の目的は、どのようにして DV をめぐる社会学的な知識が心理学的な知識や支援の技法と結びついてきたのかについて明らかにすることである。現代社会は、社会現象を社会からではなく、個人の内面から理解するという心理主義の傾向にあることが指摘されている(森 2000)。そのうえで、心理主義的な支援の技法が「社会的なもの」をその内部に組み込むことを通じて、社会学が心理主義化することによって心理主義が補強されるという事態が生じていることが指摘されている。そしてそうした事態の一例として DV をめぐる研究があげられている(崎山 2008)。しかしこれまで、DV をめぐる社会学的な知識が心理主義化してきた過程について十分な考察はなされはていない。そこで本報告では、新聞記事や DV に関する社会学的な研究を資料とし、その過程を明らかにする。

### 2 方法

新聞記事は『朝日新聞』『読売新聞』『毎日新聞』を扱った。記事の総数は、『朝日新聞』が 1,198 件、『読売新聞』が 1,070 件、『毎日新聞』が 1,073 件である。期間は、DV が社会問題として顕在化され始めた 1990 年代前半から「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護に関する法律が施行された年の翌年 2002 年までを扱う。

また本報告での社会学的な知識とは、DV の原因を社会関係や社会構造といった「社会的なもの」に求める知識をさす。さらに心理学的な知識や技法とは、DV の原因や解決策を個人の心理的な次元に還元する知識や技法のことをさす。そのうえで、DV をめぐる言説の布置連関を読み解く。

### 3 結果

分析の結果明らかになることは次のことである。それまで一部の女性の個人的な問題として捉えられていた夫から妻への暴力の問題は、社会学的な知識を前提として語られることによって、加害者が男性で被害者が女性という一定のパターンを保持した問題として提示されえていた。さらにそうした社会学的な知識を共有したかたちで、男性の立場から、男性の暴力をとらえ返す記事が報じられてくる。そこでは DV 加害者の暴力を批判する男性が、DV 加害者が男性であるという認識を受け止めることで自己否定に陥ってしまうことが示唆されていた。そのため彼らは、社会構造に起因して構築された「男らしさ」から距離をとるために自己の内面に向き合うことを志向していた。そしてその内面を理解するために心理学的な技法が援用することが求められていた。

### 4 結論

以上のことから、DV をめぐる言説においては、社会学的な知識が心理主義化したというよりもむしろ、社会学的な知識が心理主義化をうながしたということがいえる。こうしたことをふまえて当日は、社会学による DV 研究の可能性を考察する予定である。

### 文献

森真一、2000、『自己コントロールの檻——感情マネジメント社会の現実』講談社。

崎山治男、2008、「心理主義化と社会批判の可能性——感情を欲望する社会／社会を欲望する感情」

崎山治男・伊藤智樹・佐藤恵・三井さよ『〈支援〉の社会学——現場に向き合う思考』青弓社、163-184。